「あの日の出来ごと」を想う

山本　勝

先祖代々営々と受け継がれ、築き上げて来た土地で、安心して人生を送りたい。この望みは誰もが願うことである。

そんな想いを、一瞬にして一変させた出来ごとが起きた。

日本全土を震い上がらせた、二〇十一年のあの「三・一一東日本大震災」である。

強い揺れの後に襲いかかった津波の恐さ。

私はあの日、池袋からＪＲ山の手線に乗って、秋葉原経由で小岩の自宅に帰える途中であった。秋葉原駅の総武線ホームに上り、いつも通り電車を待っている時にこの揺れに遭遇した。

ホームにはまだ人の数もまばらで、時間帯もいつも通り変らない光景であった。乗降口の白線にそって、電車の来るのを待っていた。五分位が過ぎた頃だったろうか。

隣りのご婦人がしきりに、上を見つめている。私も何げなく、架線を見上げた瞬間、いきなり「ガタガタ」と激しい揺れが来た。

誰かが（地震だあ）と、大きな声を上げて叫んだ。架線が大きく揺れ、立っていられない状態になった。

ホームに居た人たちも、一様に恐怖の表情に変り動揺していた。私も近くの鉄柱にしがみついた。

激しい揺れは、一分近く続いただろうか。

ようやく揺れも収まり、ホームに居る人たちも、安堵の表情に戻っていった。

しばらくして、駅のアナウンスが有り「この地震の影響で、電車の運転を当分の間見合せます」と、放送をくりかえし流していた。

私はどうして帰えろうか、電車で帰宅出来ないことを確認して、バスかタクシーで帰えろうと、地上に降りたのだった。

大通りはすでに「人人人」であふれ、車道も大渋滞であった。
まだ三月の外は、寒さが身にしみる。
沿道には、予震に備えて様子を伺っているサラリーマンの姿が、多数出ていた。
私はこの地震が、どの程度の被害なのかを知るよしもなかった。
バスもタクシーもこの道路状態では、来ないことを察し、歩いて帰える決心をした。
歩き始めて、時計を見ると三時二〇分を指していた。
沿道際の店舗から流れて来る、テレビの放映を横目に見ながら、黙々と家路を急いだ。
途中コンビニで、飯料水やパンを買い、腹を満たしてから又歩いた。
夜道を歩いて帰宅することなど、考えてもいなかったから。
数時間歩き通したため、足は棒の様になり疲れも重なっていた。錦糸町駅を過ぎ、亀戸駅まで来て時計を見ると、七時を廻っていた。
まだこの時期夕方ともなると、寒さも一段と増し身にしみた。
亀戸駅のターミナルも、バスやタクシーを待つ人たちで、長い列を作っていた。
この時間帯、都市周辺の交通は完全にストップし、帰宅難民の人の波で、大パニックになっていたのである。
同じ方向に帰宅する人たちで沿道はあふれ黙々と歩き、家路を目指していた。
早く家に着きたい一身で、歩き通しやっとの想いで家にたどり着いたのである。
時刻は夜の九時を過ぎていた。疲れた体をソファに沈め、テレビを見てこの世の出来ごととは想えない惨状が映し出されていた。
「ア然」とし声が出なかった。そして「ボー然」と見ていた。
地震列島の日本、住み続ける以上避けて通れない宿命でもある。そうした中でも、災害に備える心構えは必要であることを、今回の災害は教えてくれた。
生活の基盤を根こそぎ、目の前で失うことなど誰が予想しただろうか。
私はテレビを見ていて、この世の出来ごととは想えない惨状に、恐さを感じながら目は釘付けであった。
この大震災の後を追う様にして、起きた福島第一原発の爆発事故、未曽有の大災害となってしまった。
この原発事故は「想定外」の事故であると、東京電力や、マスコミなどが流した

情報に、多数の国民は反発した。

空気中に放出された放射能汚染は、山や土地、そして海まで汚染され、震災から二年が過ぎても、住み慣れた土地や家に戻れない状態が続いている。　今でも避難生活を続けている人たち。人ごとではない。我が身が同じ様に遭遇したらどうなるか、考えただけでも（ぞっと）する。

原発事故が起きたら、放射能からのがれる方法を、人類はまだ持っていない。

すみやかに原発０（ゼロ）へ向うべきである。